

平成 21 年度第 2 回経営会議 議事概要

1 開催日時 平成 21 年 9 月 18 日（金） 講演：10:00～11:35

意見交換：11:40～13:00

2 場 所 本部棟 3 階 講演：大会議室

意見交換：特別会議室

3 出席者

学外：箱崎、本田、内川、野口、 計 4 名

学内：相澤、中村、佐々木、幸丸、菊池 計 5 名

（事務局）熊谷経営企画室長、高橋教育・学生支援室長、宇部研究・地域連携室長

総務財務室：保原課長、鈴木主査、曾部主査

4 会議の概要

事務局の進行により開会され、相澤理事長があいさつ・講師紹介を行った。

（1）講演

和歌山大学観光学部教授 小畑力人 氏による「現在の厳しい環境下における大学のあり方」と題した講演が行われた。

講演は、講師のこれまでの経験（学習塾→立命館→和歌山大学）を踏まえて、大学改革の必要性やその着目点等について、資料に基づき講演された。

なお、学内教職員（主に役職員）に対しても参加を呼びかけ、経営会議委員を含め 50 名程度が聴講した。

（2）意見交換

会場を特別会議室に移して、講演会講師小畑氏を交えて、経営会議委員による意見交換が行われた。

冒頭、相澤理事長から、前回会議における意見等に対する法人の見解、欠席の平山委員から寄せられた意見について報告された。

<主な意見・質疑等>

- ・ キャンパス内での様々な学生活動の活性化について、和歌山大学では何か対策を打っておられるか。
（中村副理事長）
- ・ 地理的に県立大学と似たような状況がある。その中で、学長裁量経費を活用して課外活動の活性化をしている。「クリエ」と称して、学生による自主演習を展開している。これは、学生が自主的に計画、担当教員と交渉して演習を行うもので、単位認定もしている。私立大学の中で注目されている金沢工業大学においても行われているようである。取り組みの中でポイントと考えているのは、学部の垣根を低

くしていることと思う。この自主演習においては、学部を問わず参加できることとしている。(小畑氏)

- ・ 和歌山大学における予算的な側面について説明させていただく。いわゆる政策的経費として「学長裁量経費」がある。これは、各種予算をあらかじめ配分を留保するほか、教員の欠員を学部教育に支障の無い範囲で全学でプールして、その人件費相当額を充てているものである。このほか、法人化以降、毎年の剰余金について、文部科学省の承認を得て、その使途に活用する仕組みがある。このような政策的経費の仕組みについても、公立大学でどのように展開できるか考える必要があると思われる。(小畑氏)
- ・ 立命館大学において志願者を 4 万人から 10 万人に増やすことができたと同ったが、具体的にどのようなことを行って達成されたのか伺いたい。(内川委員)
- ・ まず、高校生向けの大学パンフレットの見直しを行った。如何にカリキュラムを表現するか、教育の内容・成果をどう伝えるかについて検討を加え、分かりやすい内容に変えていった。

入試については、従来の入試方法を見直し、論文を書いてもらう「論文入試」の導入、文系学部においても数学を重視した入試の展開等を行った。

また、入試を受けに大学に来てもらうだけでなく、大学が地方に出向いて入試を実施することをスタートさせた。

ここで重要なのは、志願者が増えた年の翌年は、志願者が減少する傾向になるが、これに如何に対応するかであると考え。そのためには、入口である入試改革のみならず、教育の充実、出口である就職対策の強化と、三位一体の改革が必須であると考え。

こうした取り組みを行ってきているが、18 歳人口等、現在とは環境が異なることから、今日の環境下で、公立大学として、如何に質を保ちながら志願者の確保につなげていくか検討が必要と思われる。

公立大学の特色として AO 入試が挙げられるが、これは、高校関係者からは評判が良くない状況がある。特にいわゆる受験進学校からの評判が良くないようである。このことは、一般選抜に比べ受験対策が容易でないことが考えられるが、このあたりを如何に高校現場の先生方と合意形成を図るかが重要になってくると思われる。また、米国では AO 入試においても学力試験を行っているが、わが国でも、如何に学力を担保したうえで AO 入試を展開するかが課題と考えている。(小畑氏)

- ・ 観光学部というのは、独特なものであると感じるが、第 1 志望の学生が入学しているか伺いたい。(村副理事長)
- ・ 当方の観光学部は、経済学部から分かれて独立させたものであるが、経済学部に比べて圧倒的に第 1 志望の学生が多い状況である。遠方からの入学生も、経済学部の 2 割に比べ 3~4 割程度を占めている。岩手県からも 1 名来ている。ただ、志願者数の伸びが鈍化しており、志願者の確保が課題となっている。

また、前期日程と後期日程による偏差値の差や退学者の割合、入学後の学習意欲など、入試区分による入学者の割合をどこに設定するかも、検討を要する事項であると考えられる。(小畑氏)

- ・ 以前、社内で採用担当をしていたことがあるが、大学の入学案内は分かりにくく面白くないものがほとんどであった。まして、高校生にとっては手に取ることもしないかもしれない。見直しの余地は十分にあると考える。

事例として紹介するが、採用試験の際、筆記試験の結果で一律に合否を判定すると、多様な人材の確保に結びつかないことがあることから、秀でた技能・才能を持つ受験者に対し、あらかじめ加点して合否判定を行う手法が民間企業では行われているようである。(野口委員)

- ・ 就職支援、キャリアサポートが私立大学に比べ非常に劣っていることが、国立大学に赴任して実感したことだった。学生達に、如何に自己発見・自己表現するかを指導していくことが重要であるとする。エントリーシートによる自己表現等、徹底した指導が必要である。

また、公務員試験に目覚しい成果を上げている大学がいくつかあるが、そこで行われていることは、徹底した公務員対策講座である。大学の講義だけでは不十分であり、有名私立大学には到底太刀打ちできない状況である。(小畑氏)

- ・ キャンパス内での学生の活気については、大事なことと考えている。高校と大学を比較したとき、集まってくるエリアに大きな差があり、多様な人間との接触により、学生自身に大きな刺激になり、いろいろな体験が出来るものとする。長くサラリーマン生活を送ってきたときに、大きな力となったのは人脈であった。大学生活での様々な経験が、人脈形成には大いに役立っていたものと考えており、是非大学生生活の活性化を進めてほしい。

また、大学のブランド戦略のひとつになるものと思うが、卒業生とのつながりを強くしてほしい。卒業生との定期的な接触により、母校に対する関心を持ち続けてもらい、そのことが大学のPRにつながるのではないかと考える。先進事例として、慶應義塾大学の例があるが、これは、年1回塾長が地方に出向いて、卒業生との間で最近の大学の状況説明や意見交換を行っているようである。(箱崎委員)

- ・ 現在、同窓会支部の立ち上げを順次行っているところである。開学10年で歴史はまだ浅いが、卒業生のネットワークづくりを進めてまいりたい。

また、現在、学生ボランティアセンターが学内に設置されているが、ここに集まる学生が積極的に地域に出ていって様々な活動を展開している状況である。このような機運を拡大していき、学生生活・学生活動の活性化につなげていきたいと考えている。(中村副理事長)

- ・ 講演を聞いて感じたこととして、県立大学は、私立大学の例を参考にして思い切った取り組みを展開してもいいのではないかと思います。大学を取り巻く環境が厳しい中で、存亡の危機、存在の危機が叫ばれている状況の中で、県立大学を広く発信していく取り組みが必要であるとする。存在感を内外に示してほしいと思う。(本田委員)
- ・ 来年度から「岩手学」と題して、地域の方々に講義をしていただくことを予定しており、地域の実情等についてお話ししていただきたいと考えている。

現在、社会福祉学部と総合政策学部の学生が地域に出て行って、実習や演習を展開しているところであるが、そのことが地域に伝わりにくいようである。発進力の強化を図ってまいりたい。(中村副理事長)

- ・ 盛岡短期大学部での取り組みであるが、400～600字程度の内容で新聞へ投稿するトレーニングを行っているところである。一昨年は、紙上で紹介され、学生への刺激になっているようである。様々な取

り組みを行っているところではあるが、いわゆる広報が至っていない現状である。

「岩手学」の講義をはじめとして、地域の歴史、更には愛校精神の醸成に向けて、取り組みを進めてまいりたいと考えている。(佐々木委員)

- これまでの大学運営を考えたとき、学生の目線に立った運営をしてきたであろうかという反省がある。このことに対する教員の意識がなかなか高まってこないという印象を持っているが、国立大学はどうだろうか。(幸丸委員)
- どこの大学でも似たような課題があると感じている。意識改革が必要であるとよく言われるが、意識の改革というものは、まず実践があつて、それを通じて意識が変わっていくというものではないかと考えている。教員が関わる仕組みをつくって、そこに関わってもらって、そこでの経験から意識が変わるものとする。(小畑氏)
- 仕組みをつくり、課題を与えて取り組んでもらうことにより、意識が変わっていく、改革されるものとする。(内川委員)
- 講演の資料の中で「法人化によって岩手県立大学は変わったのか」との記述があり、このことはしっかり検証しなければならないものであると感じている。

私立大学のダイナミズムを取り入れながら、様々な事項に愚直に取り組んでほしいとのご意見だったように感じているが、これからの大学のあり方についてしっかり議論して、ご意見を踏まえた方向で全体像を組み立てていき、しっかり歩みを進めてまいりたいと考えている。

次回、第3回経営会議以降において、本日の講演、意見交換を踏まえ、具体的にどう取り組んでいくかについて議論を深めてまいりたいと思う。(相澤理事長)

(3) その他

次回会議を12月18日(金)に開催する旨、告知した。